かさことば」につながり、「入間ことば」という語が、狂言師圏で誕生する可能性も充分あると思うのである。（一九六五・七・一）

百々裏話（34）

おもて　あきら

【謡曲作者付の色々その四―】

(3)謡曲作者備考

世阿弥の伝書が発見されるまでは、謡曲は僧侶や連歌師などがその文句を作ったものであろうと、一般には考えられていたようである。江口や山姥を一休の作と考える説などがその具体的な例であるが、多くの謡曲について、その作者を僧侶や歌人に擬した作者付はほとんど伝わっていないようである。以下に紹介する本がその珍しい例であろう。

法政大学能楽研究所に、「謡曲作者備考」と表紙に墨書した江戸後期筆と認められる仮綴の小冊子がある。内容は百番の謡曲に季節と作者名とを注したもので、曲名と注された作者名とを列挙すれば次の如くである。

高　砂　西洞院殿（御門御宇）
田　村　慈恵僧正
湯　谷　小野三人（内国高女）
班　女　兵庫守知行（北面武士）
鵜　飼　大覚大僧正（日蓮宗）
難　波　我左衛門尉（熱田大宮司）
兼　平　玄智僧正
千手卒都婆小町　遊行上人（箱根山清浄光寺）
船弁慶　権中納言定家（又高野僧右快トモ）
老　松　蓮茂駿河府中
頼　政　東洞院（定之トモ）
井　筒　日像上人
鉢木羽衣　鎌倉尼御前
白楽天　大仏妙法院七代（以前トモ実不知）
実　盛　吉田兼好
玉　葛　同作
柏崎融　光誉上人
養老　山科
清経　蓮如法人
栄女　二条殿
葵上　三浦平太郎（後白河院御宇平家物語中川栄女トモ実作不知）
遊行柳　奈良上親王
竹生島　横河安養坊
朝長　遊行上人
嫉捨　作者不知
三井寺　志賀守賢能（平家物語中川栄女トモ神主之作トモ云）
所詮不知あやめ作トモ

能・お茶の御写真

観世写真部

前島良彦
前島久男

港区芝白金里町七七
電話白金（441）一八四七
一五〇〇九番



化学工業の
総合メーカー

電気化学工業

プラスチック・化学薬品
電炉品・肥料・セメント

阿漕　西行法師　海人
志賀　木村長門守　蜑馬天狗
鵜　北条四代千馬之助　定家
小原御幸　平家物語不知亀井六郎忠俓　蟬丸
梅枝　山科能泉　猩々
紅葉狩　甲斐信言　竜田
蟻通　阿蘇宮神主　夕顔
忠則　定家　敦盛
楊貴妃　作者記ニ有　角田川
木賊　大友殿　善知鳥
藤戸　天王寺伝買居士　春日竜神
玉井　京都蛸薬師僧正　年数二百年余　船橋
景清　日向国宮崎作トモ　江口
杜若　定家　花筐
黒塚　高雲トモ六十六部トモ　源氏供養
当麻　蓮如上人　山姥
加茂　□?行法師京山科　通盛
俊寛　島田左近将監後日河院御宇　檜垣
松風　山科左大臣殿　ふじ大鼓
西行桜　山川尾崎雲?誉　小塩
誓願寺　鎌倉光寺　芦刈
呉服　小町道風　善界
八嶋　日向国宮崎作者　ばせを
鸚鵡小町　中納言行信　通小町
桜川　蓮如上人　天鼓
東岸居士　一休和尚　右近

日朗上人
比叡山玄和僧正
宗茂
西行法師
作者不知弘法大師トモ
今春蟬行
内藤左衛門佐後ニ河内守トモ云
観世世阿弥
冷泉院北面正信
世阿弥
世阿弥
世阿弥
一休和尚
世阿弥
河上神主和州十二太夫先祖
蜷川新左衛門トモ一休トモ親鸞上人トモ
中川采女作トモ
定家
府中蓮茂
吉田兼好
安中左三尉生国不知
弘法大師
日連上人
定家
俊成
権中納言兼好兼好六代孫

各種謡本
能謡参考書
稽古用品

観世流機関誌
月刊
観世
A5判六四頁
価一部一〇〇円
送料一五円

観世流宗家本発行元
檜書店
千代田区神田小川町二ノ一
二九一局二四八八～九番

女郎花　小野寺上人
関寺小町　定家
二人静　伏見殿土御門御宇
浮船　一休上人
三輪　天王寺盤若寺上人
安宅　比叡山能弁和尚
東北　定家
錦木　宗茂
雲林院　定家
白髭　比叡山妙法院行順
盛久　日朗上人
道成寺　桜房玄海河内国倉国山
仏原　横川登須行弁
唐船　道誉和尚国所不知
邯鄲　天王寺盤若寺上人
殺生石　玄信和尚
野宮　友信光源氏十四代
百万　冷泉院北面正信
自然居士　一休和尚

全然信用できない作者付であることは一見して明瞭であろう。夕顔を内藤左衛門、源氏供養を河上神主の作とし、それぞれ「後ニ河内守トモ云」「和州十二太夫先祖」と注していることは、能本作者注文系の説をも参照していることを示しており、敦盛・善知鳥・春日竜神・船橋・花筐を世阿弥作とし、竜田を金春禅行（禅竹の誤写）としているのもそれを思わせるが、全体的には独自の作者付と言ってよいものであろう。定家の作とされる曲が八曲、兼好法師作が三曲あるのを初め、文人を作者に擬した曲も多いが、半数近くの曲は、一休和尚（四曲）を初めとする僧侶や神職が作者とされ、北面の武士や公家らしき人物など、有識者と見なされる人物も数多く登場させられている。光源氏十四代の子孫が野宮の作者であるという説などもあって、甚だ愉快な内容であるが、当麻・柏崎を蓮如上人阿漕を西行法師とするなど、荒唐無稽ではあるが、一応は曲の内容に応じて作者をあてがっているようである。

こうした作者付がいつ頃成立したものかよくわからないが、百番の曲名とその順序が、延宝頃から明和頃まで、江戸期を通じて最も広く流布していた内百番謡本の組合せと一致しているところから推すと、その組合せが廃れた文化・文政の頃よりは以前であろう。

以上、作者付としては無価値に等しい本であるが、変った内容のものなので紹介してみた。

（40・6・28）

表紙の写真は六月の舞台から―**江口**―

（吉越立雄撮影）



